

出合いのあり方の変化

文 佐渡島庸平

text by Yohsei Sadoshima

ネットが変えたもの、それは出合いだ。

ネット以前の生き方は、自分の身の回りのもので幸せになるのが最も実現可能性が高かったので、我慢できることが、重要な能力だった。「足るを知る」ことが、美徳とされた。どこまでも納得できるものを探し続けることは、周りとの調和を乱すだけでなく、探している本人自身が苦しくなりやすかった。自分の納得を追求し続ける生き方は、クリエイターだけに許されていた生き方だった。

インターネットによって、さまざまなものとの出合いが容易になった。Amazon、楽天によって、今まで現地に行かないと買えなかったものも簡単に買える。ヤフオクやメルカリなどで、もう販売が終わっているものでも手に入れることができる。

今の我々には、無限の出合いの可能性が秘められている。もはや、ものだけではない。場所、仕事、人など、すべての出合いの可能性が無限にあり、その中から選択していかないといけない。

どうやって選択していかばいいのか。それが、誰も分からなくなっていた。

そんな時に現れたのが、こんまり（近藤麻理恵）

さんだ。片付けの方法で、全世界で1200万部も売れることはできない。「ときめき」を基準にして、出合ったものの中から、身近に置くものを選べばいいという、現代の生き方のシンプルな指南だったから、全世界で同時に受け入れられた。

ときめきを大切にすると、自分の納得を大切にすることである。今あるもので、満足できるように自分の心を調整するのではなく、自分の心が何を求めているのかを自分で知る。自分を深く知り、自分にぴったりとあったものを身の回りに置く。自然体でいられるようになるのが、カッコいいこととなった。

『アナと雪の女王』がありのままでもいいと歌いあげられるのも、同じ社会の変化を捉えている。『鬼滅の刃』をはじめとして、最近流行るコンテンツの主人公は、みな、何かを成し遂げようとはしていない。そうではなく、自分のこだわりを達成したくて、自分の納得を大切にしている。

このようなコンテンツの変化は、すべてネットによる出合いのあり方の変化の結果だというのが、僕の仮説だ。



Profile

株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形のあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。